

# 「府内城三之丸 武家屋敷跡の発掘調査速報」



## 調査の概要

大分市教育委員会文化財課では、荷揚町小学校跡地の発掘調査を行なっています。発掘調査は、おおよそ 2 年間にわたり、約 5500 m<sup>2</sup> の調査を行います。

荷揚町小学校の跡地は、江戸時代には、府内城三之丸の武家屋敷地として、家老や奉行クラスの上級武士が居住するエリアでした。そのため、調査では江戸時代の武家屋敷における武士の暮らしの様子が解明されることが期待されます。

DATA	
名称:	府内城三之丸
所在地:	大分市荷揚町(荷揚町小学校跡地)
調査面積:	約5500m <sup>2</sup> 内 1・2区 約1000m <sup>2</sup> 3区 約2500m <sup>2</sup> 4区 約2000m <sup>2</sup>
調査期間:	平成29年8月末～平成31年8月頃 平成30年1月時点で1・2区終了し、平成30年2月～平成30年12月に3区、平成31年1月～同8月4区調査予定

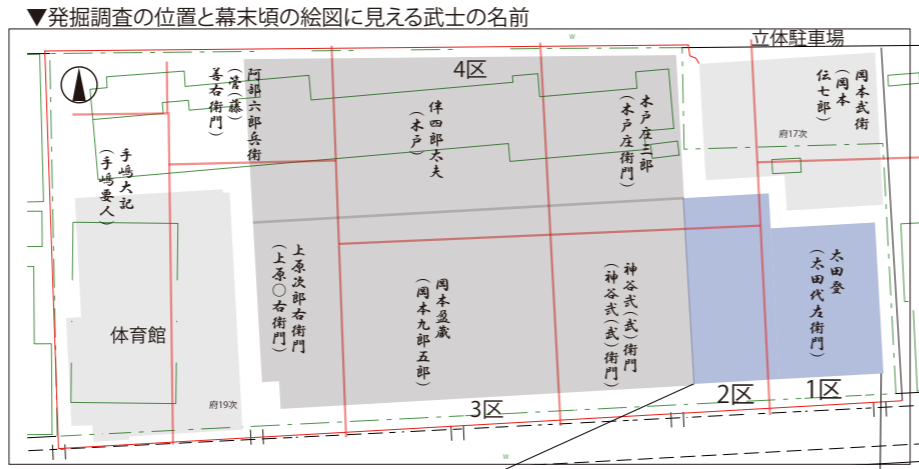




## 調査位置と絵図

幕末頃の絵図には、府内城三之丸の屋敷割と当主の名前が書かれています。右図は荷揚町小学校跡地での屋敷割の想定と当主の名前です。全部で7軒分の屋敷の調査を順次実施しています。

現在調査の終了した1・2区には、太田氏と神谷氏の屋敷にあたり、これから調査を行なう3区は、神谷氏、岡本氏、上原氏の屋敷と、伴氏、木戸氏の屋敷の一部にあたります。



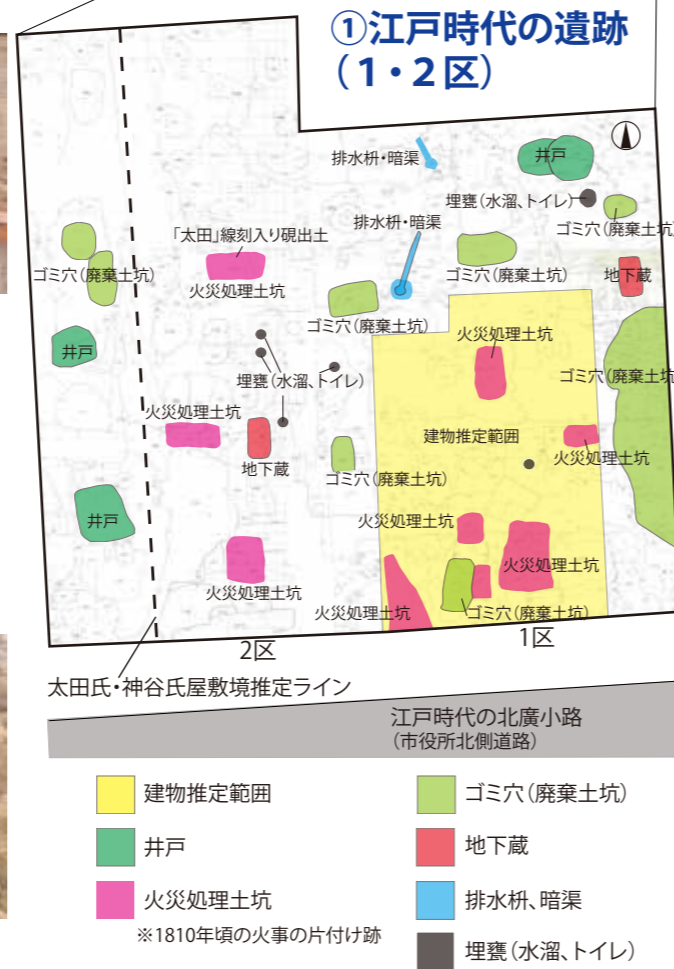
▲火災処理土坑(19世紀初頭)

▲火災処理土坑の掘削作業▲



▲井戸跡(18世紀後半)

▼排水枡と暗渠(19世紀前半)



## ①江戸時代の調査の成果

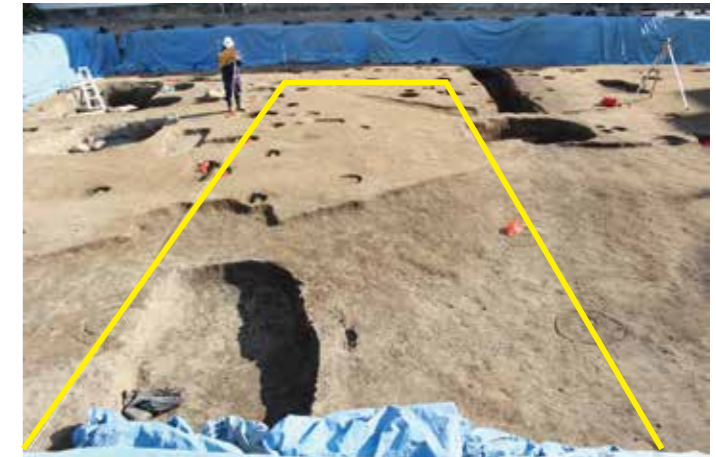
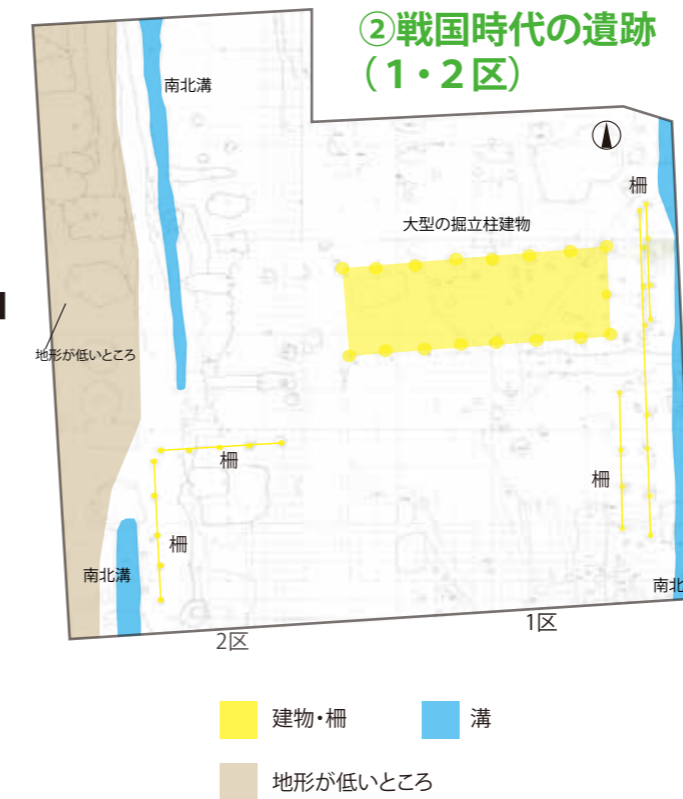
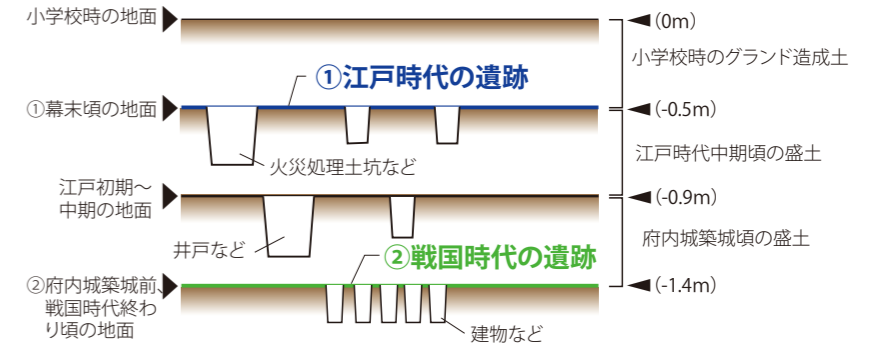
1. 絵図にある太田氏の武家屋敷地で、屋敷(建物)の位置が判明しました。
2. 建物の周囲には、井戸、排水枡・暗渠、トイレや水溜用の甕、地下蔵や、ゴミ穴などが配置されており、屋敷内部の様子がわかりました。
3. 1810年頃の城下で起こった大火の片付け跡が見つかり、その中から、「太田氏」の名前を刻んだ硯が見つかりました。
4. 井戸や土坑の配置から、絵図に描かれている太田氏の屋敷と神谷氏の屋敷の境が推定できました。



## 江戸時代の地面と戦国時代の地面

現在の地面の下には、古い時代の地面が埋まっています。時代が新しくなるにつれて、造成や盛土によって地面が高くなるためです。

右図のように小学校のグラウンドの0.5m下に、江戸時代の地面が埋まっています。さらにグラウンドから1.4m下には、府内城築城以前の戦国時代の地面が埋まっています。同じ場所に重層的に遺跡が形成されており、それぞれの地面ごとに生活の痕跡を見つけることができました。



▲大型の掘立柱建物(16世紀後半)



▲南北溝と南北柵(16世紀後半)



## ②戦国時代の調査の成果

1. 城下町が形成される前(1597年以前)の大型の掘立柱建物跡が発見されました。
2. 建物は長さ14m×幅4.7m(東西7間×南北2間)の大きさでした。建物の周囲は東側の柵と、東西の南北溝によって区切られており、一般の民家とは異なる公共性の高い施設と考えられます。
3. 時期的に、戦国時代の府内の町に関わる荷降ろし場などの港湾関係施設や、府内城を築城する際に使われた建物などの可能性があります。
4. もともと西側の地形が低くなっているため、城下町を建設する際には、こうした低い土地全体を50～60cm程度埋めてから築城しており、大規模に土木工事を行なったことがわかりました。



## 武家屋敷からの出土品

府内城三之丸の武家屋敷からは、たくさんの茶碗や皿、徳利などの生活用品が出土しました。その多くは、いわゆる伊万里焼と呼ばれる磁器の焼き物で、佐賀県有田地域で作られたものです。当時は、磁器の茶碗や皿が出回り始めた頃で、現在ほど安価ではなく、一般庶民などの多くは、主に木製の椀を使っていました。そのほか、大分市の細地域で作られた瓦も多く出土しており、その中には、製作者の名前が刻まれた鬼瓦も見つかっています。このように、これほど多くの磁器の茶碗や皿、瓦などが出土することは、上級武士としての暮らしぶりを示すものと考えられます。

また、出土品の中には、焼継文字や線刻によって人物名が書かれた品物があります。こういった名前のわかる出土品はその屋敷地の居住者を示すもので、絵図との比較によって居住者を特定する上で、大変貴重な発見となりました。



## 焼継文字とは

焼継は、割れた器の破片を着けるために、溶かした鉛ガラスなどを使って修理することで、焼継文字は、その修理の際に、器の所有者がわかるように焼継屋（修理職人）が赤字で書いた所有者の名前です。

調査で、この焼継文字が出土することによって、屋敷の所有者の名前が判明しました。



▲焼継文字の書かれた伊万里焼



▲「太田氏」の名前が書かれた硯



## 名前が書かれた硯

絵図にある「太田氏」の屋敷の範囲から出土した「太田氏」の名前が書かれた硯です。

1810年頃の火災の後に、片付けを行なった際に掘った穴（火災処理土坑）から出土しており、「太田氏」の屋敷地であったことが証明されました。



▲数多く出土した伊万里焼や陶器の器



▲製作者（高島助ノ丞）の名前が書かれた鬼瓦